

昭和八年三陸大津波に係る津波境標柱の宮城県旧本吉郡を中心とした分布について

白幡 勝美

1. はじめに

宮城大学と石巻専修大学の学生によって宮城県沿岸に平成 23 年東北地方太平洋沖地震津波（以降，“この度の大津波”と略記する）の浸水を示す標柱の取り付けが行われている。発災の 3 月 11 日にちなんで 311 本建てるとのことで今後の津波防災に大きな意義をもつものとして敬意を払いたい。このような取組は昭和 8 年の大津波の後にも起こっていて、津波の到達点に多くの標柱が建てられている。

そのような標柱を「津波境標柱」と表記するものとし、1 基ずつ区別する場合は、

「地区名」＋「津波境標柱」と表記することにする。

津波境標柱は津波の記念碑等に比べればかなり小さいものである。それだけに、目につき難く、かつ、道端や川沿いに建てられていることが多いため、道路工事や河川改修によって失われやすいところがある。そのような津波境標柱の本県での実態はこれまで不明であった。そこで、本稿では、繰り返し津波被害を受けてきた宮城県本吉郡を中心に、物的な根拠をもって存在を明らかにできたもの、及び存在したとの情報を地区住民との話を通して得ることができたものを網羅することを試みた。

尚、津波の記念碑も津波到達点に程近く建てられる例が多くみられる。そのような津波の記念碑も津波境標柱の一種であろうが、津波そのものの到達点を示す意図が明かに認め難いものは、津波境標柱には含めないことにした。

2. 海岸線を持つ自治体と津波境標柱

「市町村パラパラ地図」完全版「宮城県」

<http://mujina.sakura.ne.jp/history/04/imgs2/19430211.gif>によれば、昭和 8 年の大津波後の直後に、現在の本吉郡に海岸部を持っていた宮城県の旧町村は、北から唐桑村、鹿折村、気仙沼町、大島村、松岩村、階上村、大谷村、津谷町、小泉村、歌津村、志津川町、戸倉村である。今回、この中で津波境標柱の存在を確かめることができたのは、旧大島村、旧歌津村、旧戸倉村である。

また、旧雄鹿村にも標柱が存在した。

3. 3 つの村の津波境標柱について

3-1 旧大島村

旧大島村の昭和 8 年三陸大津波での浸水状況の記録が大島小学校「昭和 8 年津波関係綴り」の中に「大島村海嘯被害調査（第 3 版）」（図 1）として大切に残されていた。

これによって津波境標柱は磯草、浦浜、田中浜、長崎、中山、温浜、横沼、駒形、要害、田尻地区等の各地区に分布していることが予想できたが、それであっても地図を持って海岸に行けば直に見つかるようなものではなく、その存在にかかる情報を得るためには津波境標柱の近くに居住し、津波に関心を持ち続けてきた住民から話を聞くのが最も確かな方法であった。旧大島村の調査は元気仙沼市文化財保護審会会長である村上敏氏をはじめとする関係者の協力があってできたものである。

調査の結果、旧大島村の津波境標柱は 3 地区に存在を確認でき、3 地区に存在したとの情報（確かに存在したことを知っているとの話）が得られた。現存している 3 つの碑から旧大島地区の津波境標柱の特色がわかった。それは、それらの碑はコンクリート製で幅約 11cm の 4 角柱であることであり、表面のモルタルが生乾きのうちに村長の菅原熊治郎が

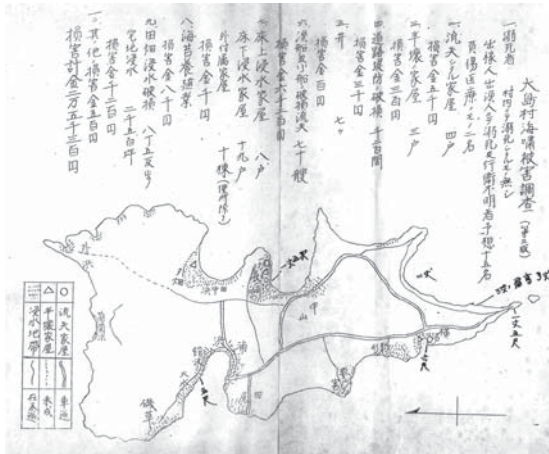


図 1 気仙沼市立大島小学校「津波に関する書類」：大島村海嘯被害調査（第 3 版）

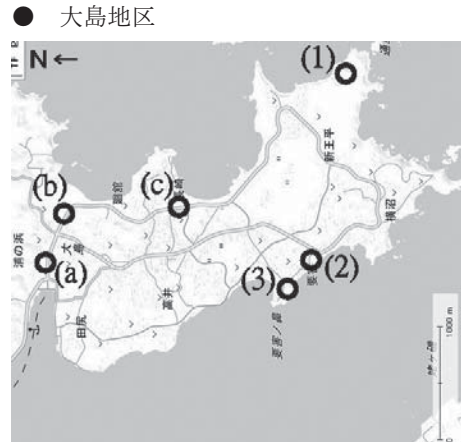


図 2 大島地区における分布

指で書いたとされる文字が読み取れることである。津波標柱と菅原熊治郎との関係は菅原熊治郎が村長の時代、旧大島村役場に勤務していた住民から聞き、確かめることができた。

なお、裏面には「昭和 8 年 10 月建之」と刻まれている。津波のあった年に素早い津波対策がとられたのである。これまでに判明した津波境標柱・津波境柱跡分布が図 2 であるが、旧大島村での津浪境標柱跡を (a) ～で、現存を確認できた津波境標柱 (1) ～で示す。各旧村における標柱の分布の図による表示は以降同様とする。

(a) 浦の浜津波境標柱跡

浦の浜から田中浜に向かって道を 300m 程進んだところの左側周辺にこの碑があったとされている。残念ながらこれは道路工事により失われてしまったとみられる。

(b) 田中浜津波境標柱跡

浦の浜から田中浜に向かう道が田中浜まであと 250m 位となったと所の民家とは道路挟んで反対側の位置にあったとされている。なお、この場所にはなかったとする住民もあり、今後の調査・検討が必要である。

(c) 小田の浜津波境標柱跡

道路工事によって失われてしまったとされている。

(1) クジラ津波境標柱

中沢商店のところから温浜に向かうと、浜に近くなって大きく左側に曲がるころがある。その曲がるころは沢になっていて、地元ではこの沢を「クジラ」と呼んでいる。昭和の津波の折り、鯨が打ち寄せられたためであるともされる。



写真 1 周囲には木が生い茂る。

クジラには井戸があり、これまで災害の時には使ったものであるという。この度の大津波でも、島民にとって貴重なものとなった。

この井戸から沢の上流側に30m余の所に津波境標柱が立っている。

この碑の確認については、地元在住熊谷義夫氏の協力を得た。

(2) 要害中沢津波境標柱

この標柱は2つの民家の境にもなっていた、津波境標柱が宅地境としても意味を持っていたことが文書として残っている。

撮影時（平成26年4月）標柱の周囲は工事中であったが標柱が保護されるよう十分な配慮がされていた。



写真3 要害津波境標柱

残念なことに、この標柱は瓦礫撤去の際に大きな力が加わり地面の位置で折れてしまっている。(内部に鉄筋が入っているのので立っている)



写真2 復旧工事中

(3) 要害中沢津波境標柱

この津波境標柱は保存状態が良好で、正面の文言「嘯害至此」がよく読める。

「嘯」, 「至」, 「此」の各文字はかなり簡略化、デフォルメされたものになっている。既に述べたように村長菅原熊治郎の書によるものである。菅原熊治郎は書家としてもよく知られている。

3-2 旧歌津村

旧歌津村の昭和8年三陸大津波の浸水域は「宮城県昭和震嘯誌」：歌津村海嘯罹災畧図に示されている。この図から港、田浦、石浜、名足、中山、馬場、泊、伊里前他の地区で大きな浸水があったことが分かる。



図3 「宮城県昭和震嘯誌」：歌津村海嘯罹災畧図

実際、港、田浦、石浜、名足、中山、馬場、伊里前、寄木の各地区で津波境標柱を確認、もしくは津波境標柱について「かつてそこにあった」との情報を得た。

それらの場所は図 4、図 5、図 6、図 7、図 8 に示す。

● 港地区

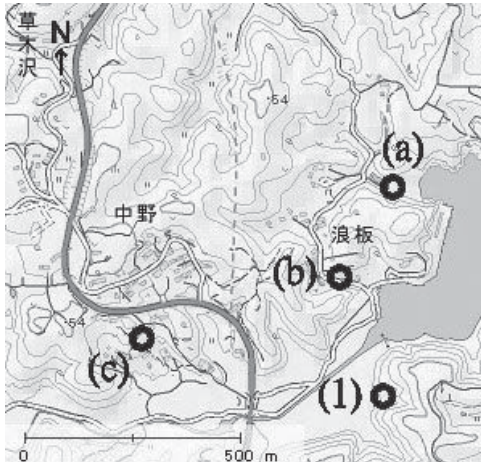


図 4 港地区における分布

(a) 鎌の前浜津波境標柱跡 (埋没)

鎌の前浜の後背地は田圃であったが、畑になっていて、更にはその陸側は小さな湿地 (放置田) になっていた。この畑と湿地の境、同時に浜に至る道との境に碑が立っていた場所であるという。(この度の大津波の前に埋められてしまっていた) 更に、この度の大津波の後、湿地にも土が入れられ整地されたため、標柱のあった場所は分かり難くなった。

(b) 浪板津波境標柱跡 (埋没)

港の浜の護岸堤にそって北に進み、隣の浜である鎌の前浜へ向かうと、直に登り坂になる。その坂を 30m ほど進んだ所の道端 (進行方向右側) に電柱が立っていた。その極近く、石垣に接するところである。

(c) 津波境標柱跡

図で示した位置より海側に 15m 程のところが本来の位置であったとのことである。圃場の整備により移動させられている。

(1) 港地区田の縁津波境標柱



写真 4 石碑群脇。

正面の「津浪境」の文字が読みとれる。

港地区で碑の本体を見ることができたのはこの碑だけである。港地区の田の脇の細道を共同墓地がある山の方向に進んでいくと、左側に石碑群のある所があり、かつてはその近くの土手の上に、碑は横倒しになっていた。田圃を広げるとき引き抜かれて、その場所に置かれたものであろう。この度の大津波で流されたが、前述の石碑群の脇に置かれている。

● 田の浦地区

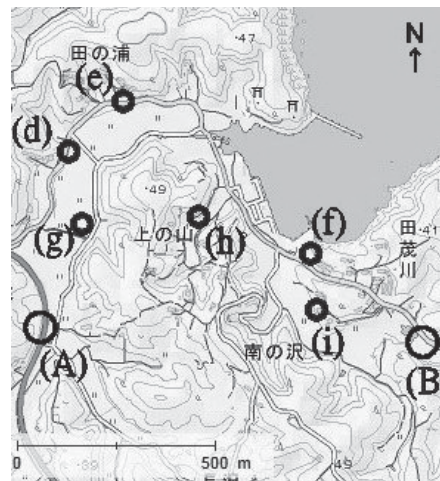


図 5 田の浦地区における分布

この地区には現存する津波境標柱は一基も見つからなかったが、標柱が存在していたことは確かに記憶されていた。図中の(A), (B)地点には明治29年の大津浪に関する碑が建っていたという。

● 石浜地区

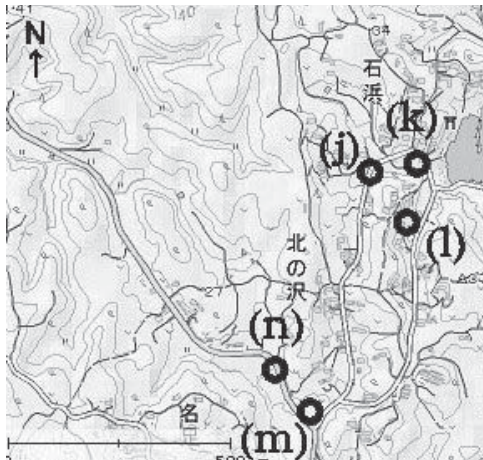


図6 石浜地区における分布

(m) 地点は名足地区から石浜地区へ向かう途中の三叉路付近にあたる。

● 名足・中山・馬場地区

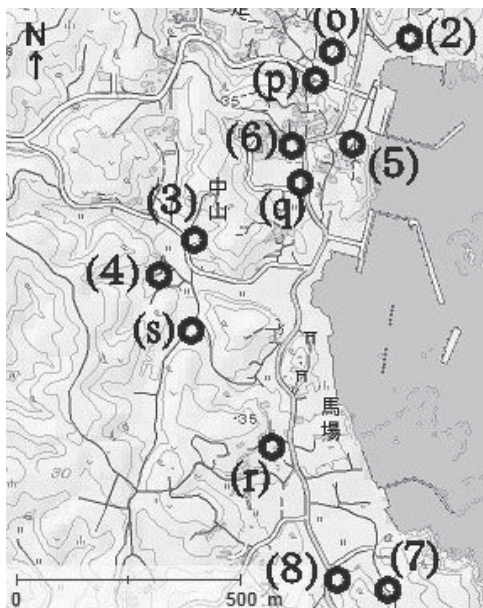


図7 名足・中山・馬場地区における分布

ここでは津波境標柱跡5カ所、現存する津波境標柱7基を確認することができた。

(2) 名足旧道・神社登り口津波境標柱



写真5 草の茂みの中にある。

(3) 中山地区（沢奥1）津波境標柱



写真6 道路脇

(4) 中山地区 (沢奥 2) 津波境標柱



写真 7 山の縁の細道脇

(6) 名足小学校付近津波境標柱



写真 9 男澤達夫氏宅地中

(5) 名足南津波境標柱



写真 8 海岸近くの民家のコンクリート塀脇

境碑 (6) と (q) は同一の可能性もあるものと思われる。

この度の大津波で流されていたものを拾ってきたものとのことである。

(7) 馬場南津波境標柱



写真 10 古井戸付近

この碑の場所は三浦義勝氏宅の古井戸の在った場所近くである。

(8) 馬場津波境碑



写真 11 スタンド向いブロック塀脇

(9) 伊里前津波境標柱



写真 12 路に沿った堀の脇に位置していた。
平成 23 年 3 月 11 日の大津波により
流失した。

● 伊里前・寄木地区



図 8 伊里前・寄木地区における分布

旧歌津村の他の標柱と同様に正面に「津浪境」の文字がはっきり読み取れ、碑は幅 13.8cm の四角柱であって、裏面には「昭和八年三月三日」と刻まれている。

寺近くの橋の袂付近の津波境標柱跡 (t) については今後とも存在したのかどうかを含めて調査が必要であるが、寄木浜の 2 つの津波境標柱については疑う余地はない。

3-3 旧戸倉村

旧戸倉村については、旧大島地区での図 1、旧歌津地区での図 3 に相当する津波浸水域を示す図は発見されていない。

旧戸倉村は統合により、南三陸町の一部となったことから、明治・昭和の三陸大津波の資料も南三町図書館に所蔵されていたはずであるが、この図書館はこの度の大津波で破壊・流失してしまっている。

しかしながら、後述するように協力者を得ることができ、多くの津波境標柱・津浪境碑跡が分かったので図 9、図 10、図 11 にそれを示す。

● 折立地区

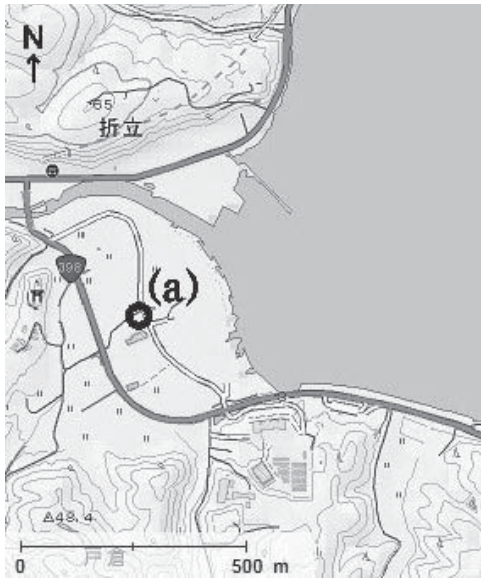


図 9 折立地区における分布

(a) 旧戸倉小学校付近津波境標柱跡



写真 13 旧戸倉小学校体育館脇

残念ながらこの碑はこの度の大津波により流失してしまったが、地元在住の佐藤和子氏が写真に残してくれていた。

● 波伝谷地区

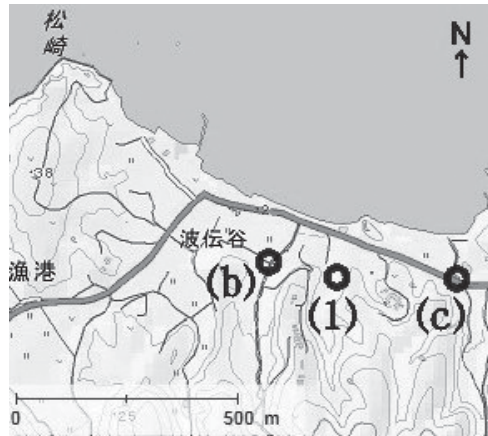


図 10 波伝谷地区における分布

(b) 波伝谷津波境標柱跡

波伝谷在住阿部喜久男氏の案内による。

阿部喜久男氏は「母に背負われたまま流れ、この付近で助けられたと言いつけられた」と話す。

(c) 津波境標柱跡

漁村センター前にある橋の袂にあったという。

(1) 波伝谷津南波境標柱跡

(b) 波伝谷津波境標柱の東側にある小さなため池の側にあったとされている。この度の大津波により流されたが、元の位置近くに放置されていた。旧戸倉村の各碑は幅 14.8cm の四角柱に、高さ 5cm 四角錐が載った形状をしていて、正面には

「昭和八年三月三日津浪境」と彫られている。

この碑には木の棒が結びつけてあり、その先にはビニールのシート状のものが結びつけてあった。この度の大津波の直後に何らかの目印にされていたようである。

● 藤浜・長清水・寺浜地区

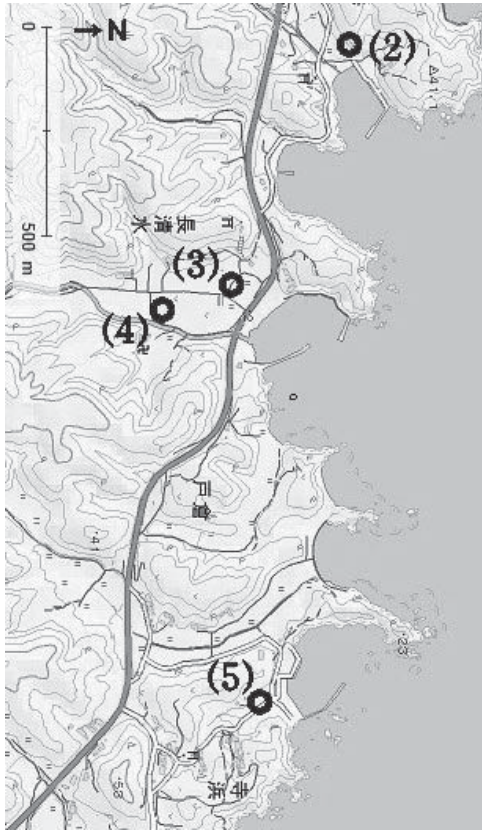


図 11 藤浜・長清水・寺浜地区での分布

(2) 藤浜津波境標柱



写真 15 倉庫脇土手下

(3) 長清水津波境標柱 1



写真 16 民家脇

佐藤和子氏の協力により所在が分かった。

(4) 長清水津波境標柱 2



写真 17 碑の周囲は畑である。

(5) 寺浜津波境標柱



写真 18 碑写真上部に梵字のように見えるものは津波による擦跡である。

気仙沼市職員佐野和也氏によると「土中に埋まったままになっていたがこの度の津波で表土が流され発見された。仮設トイレ設置のため、少し道理側に移動された」とのことである。

3-4 旧雄勝村

旧雄勝村についても図 1, 図 3 に相当する津波浸水図が手に入れることができなかった。荒地区での柱状の碑の確認は地元在住の高橋清氏の案内によるところが大きい。

「今度の津波に合わせて、もっと高い所につくらなきゃ・・・」と高橋氏も話していて、地元では津波境標柱としての意識が強いことから、これらの碑を津波境標柱としての扱いにしたものである。

● 船越荒地区

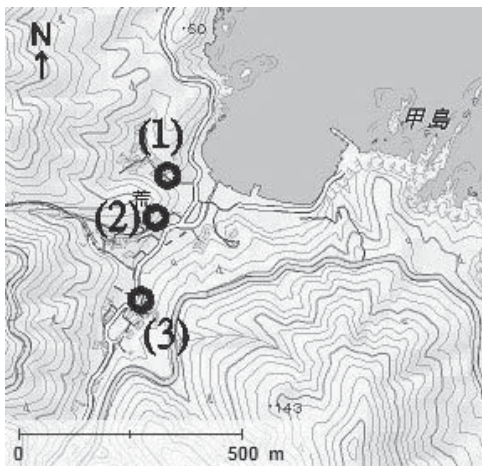


図 12 船越荒地区における分布

荒地区の碑の正面には「地震があったら津波の用心」と刻まれている。

(1) 荒津波境標柱 1



写真 19 集落入り口に位置する。

(2) 荒津波境標柱 2



写真 20 上り坂脇に位置する。

土地の整備に伴い、高い位置に移されたとのことである。

(3) 荒津波境標柱 3



写真 21 小川の岸に位置する。

4. まとめ

津波念仏碑や津波記念碑は津波による犠牲者を悼み、教訓や戒めを残す意味合いが強いものであるが、津波の現象や規模をそのものを後世に伝える上では津波浸水地点の情報が極めて重要であり、またそのように考えることは今も昔も変わるところがないはずである。したがって、過去の津波を知る上でも、その当時の防災への意識の強さを推し量る上でも津波境標柱の設置がどうであったのかを知ることが大切なものである。

この度、旧大島村で 6 基、旧歌津村で 31 基、旧戸倉村で 8 基、旧雄勝町で 3 基の津波境標柱の存在の確認、もしくは存在した場所の証

言を得ることができたが、存在を確認できた各旧村の津波境標柱は、旧村毎に決まった様式を持っていたことから、各々の村毎に組織的に建てられていたことが分かった。今度の調査は宮城県の旧本吉郡を中心とするものであったが、太平洋沿岸における津波境標柱・津波境標柱跡は決して少なくない可能性を示すものとなった。

今後の調査により、津波境碑並びにその跡がより数多く確認されていくと思われる。

謝 辞

旧大島村の調査では、郷土史研究家小野寺敏文、地元在住熊谷義夫氏に、旧歌津村の調査では宮城県水産漁港部千葉隆、地元在住阿部松夫、男澤達夫、三浦義勝、三浦正七、三浦義昭、畠山利夫、及川勉氏に、旧戸倉村の調査では、地元在住佐藤和子、阿部喜久夫、気仙沼市役所佐野和也氏、旧雄勝町の調査では、高橋清氏に大きな協力を頂いた。ここに感謝致します。

参考文献

- 『昭和 8 年津波関係綴り』 気仙沼市立大島小学校 昭和 8 年
- 『宮城県昭和震嘯雑誌』 宮城県 昭和 10 年
- 『市町村パラパラ地図 完全版「宮城県」』
<http://mujina.sakura.ne.jp/history/04/imgs2/19430211.gif>
- 『宮城県における明治・昭和・三陸津波関係碑』 白幡勝美・佐藤健一 平成 26 年